

# 「イスラエル建国史」

## 10. ヘルツェルの外交活動

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人



滝川 義人  
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー(1968～2004)として勤務。現在、MEMRI(メモリ、中東報道研究機関)日本代表。ユダヤ、中東研究者。主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』(新潮社)、『ユダヤを知る事典』(東京堂出版)など多数。

### ◆先月号の内容◆

1897年に開催された第1回シオニストコンGRESSは、世紀の「ユダヤ人議会」となった。このコンGRESSでは、シオニズム運動の推進母体となる世界シオニスト機構が創設され、基本方針となる「パーゼル綱領」が採択された。しかし、シオニスト運動の父ヘルツェルの前には、克服しなければならない難問が待ち構えていた。

### エレツイスラエル訪問

1898年10月、ヘルツェルはダビッド・ヴォルフゾーン(1856-1914、第2代シオニスト機構会長)ら4名の同僚で代表団をつくり、初めてエレツイスラエルを訪れた。

その頃、当地のユダヤ人口は約5万。3万がエルサレムに住み、そのほか、ツファット(6,000)、ティベリヤ(3,200)など5都市が主な居住地であった。一方、開拓村は、第1アリヤが始まってこの10数年の間に20か所となり、6,000人が農業に従事していた。ユダヤ人社会(エシュブ)の20%は、第1アリヤの移民であった。



ティベリヤの温泉 1893年

ヘルツェル一行は4か所の開拓村を訪れた。最初に行ったりシオン・レツィオンは沈滞した空気で、住民に覇気がなくヘルツェルは大変驚いた。9年前ロスチャイルド家がワイン醸造所カルメル・オリエンタルを設け、監督官が常駐していたので、住民は使用人のような存在であった。

しかし、レボボットは違っていた。ロバに乗った若者20名が早駆けして出迎え、村では子どもと大人が歌と

踊りで歓迎した。開村は1890年、ワルシャワ出身と80年代の移民が作った村で、最初から自前の労働力で開拓に従事していた。農作物は後年かんきつ類の栽培で有名になるが、その頃はぶどうとアーモンドが主力だった。ヘルツェル一行を歌と踊りで歓迎したように、文化活動が盛んで、20世紀初頭には、ここがエシュブの文化活動の中心になる。

### エルサレムの印象

その後一行は、6年前に完工したヤッフオ・エルサレム鉄道でエルサレムへ向かい、終着駅のタルピヨットで下車した。ここからは徒歩でヒンノムの谷の西側にひろがる新市街へ行くのである。ヘルツェルは月光をあびて黒々とそびえるダビデの塔に感動した。

新市街地は、イギリスの事業家モーゼス・モンテフィオルが1855年に土地を購入した後、建設された新しいユダヤ人地区であった。ヘルツェルがエルサレムを訪れた時、人口の62%を占めるユダヤ人社会は、城壁内のユダヤ人地区を含め、既に60の地区に居住していた。しかし生活は貧しく、エシバ(ユダヤ教神学校)の学生、未

亡人、孤児のほか零細民の多くが、ハルカ(海外ユダヤ人社会からの義援金)で生きていた。年間約10万英ポンドの義援金は、アシュケナジ系社会ではコレリムと称する福祉団体が管理し、スファルディ系は世話役が分配していた。

ヘルツェルは、エルサレムに漂う濃厚な宗教的空氣に驚いている。トルコ帝国は、帝国内のユダヤ人社会に主席ラビに相当するハハム・バシ(主席賢人の意)を任命し、社会の責任者として扱っていたが、エルサレムには、特にリシオン・レツィオン(シオンの第一人者)という称号を与えていた。



エルサレム駅 1890年代

任命されるのはスファルディ系のラビで、アシュケナジ系のユダヤ人が増えるにつれ、摩擦が生じていた。

エルサレム人口の20%強を占めるキリスト教徒社会も活動的であった。1860年代初めロシア正教会がロシアンコロニーを作ったのが手始めで、ドイツコロニー、アメリカンコロニー、フレンチコロニーなどが生まれ、勢力を競い合った。

## ドイツ、トルコ、ロシアへの働きかけ

ヘルツェルのエルサレム訪問は、外交活動の一環であった。ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世の聖地訪問に合わせて、やって来たのである。道中コンスタンチノーブルで皇帝はヘルツェルに謁見を許し、エрецイスラエルでは、ヘルツェル一行がペタハティクバで馬上の皇帝に挨拶したので、エルサレムで会うのはこれで3度目であったが、表敬の目的は皇帝の力添えを願い出ることであった。皇帝が接見した幕舎作りの会見場には、バルンハルト・フォン・ビューロー外相が待立し、目を光らせていた。ドイツの保護下で推進するユダヤ人の入植事業はドイツ、トルコにとって利益になる。ユダヤ人の移住が自由になるよう、トルコの سلطان を説得してほしい、とヘルツェルは言った。皇帝は、否定的態度は見せなかったが、何の成果もなかった。



ヴィルヘルム2世



プレーベ内相

1902年の2月と7月にもコンスタンチノーブルを訪れている。しかし、トルコ帝国が提示したのは、メソポタミアの入植で、ヘルツェルは失望した。

ユダヤ人が一番多く住み、しかも反ユダヤ主義的環境が濃厚なのは、ロシアであった。ヘルツェルは1903年8月に、プレーベ内務相らロシア側要人に会うためサンクトペテルブルクへ行った。ロシアからの安全な移住に便宜をはかって貰いたいというのが要請の主旨であった。8月5日に会ったプレーベ内相は、ユダヤ人を減らす運動なら歓迎するが、ロシア国内でユダヤ人の民族感情をたかめるのは困ると述べ、同化不能を強調して民族感情を強めるプロパガンダはするな、とクギをさした。そして、「自分に関心があるのはユダヤ人駆逐だけである」と、あからさまなことを言った。

## 第5回シオニスト kongress

シオニスト kongress は第1回から5回まで、毎年開催された。ユダヤ人社会の抱える問題は深刻であり、開催中は参加者が激論した。しかし、分裂することはなかった。ところが第5回(1901年12月)では、退場者が出た。宗教哲学者のマルティン・ブーバー(1878-1965)、化学者のハイム・ワイツマン(1874-1952)そしてシオニスト機構設立者の1人レオ・モツキン(1867-1933)が、ヘルツェルを批判して退場したのである。この3人は民主派と称され、外交活動に終始し、実践作業に力を入れていないとし、文化、芸術の振興にもエネルギーを注ぎと主張したのであった。

それまで、ヘルツェルの外交努力は全くの成果なしの状態、特に力を入れたトルコ、ドイツ、ロシアの三帝国は、いずれも15年後には崩壊してしまう。一方、ヘルツェルが接触した

大英帝国は、具体的な提案をしてくれたが、提案内容の諾否をめぐって、シオニスト運動は分裂の危機に直面するのである。

## シナイ入植計画

1902年10月22日、ヘルツェルは、『ジューイッシュクロニクル』紙編集長レオポルド・グリーンベルグ(1861-1931)の紹介で、ジョセフ・チェンバレン植民地相(当時)と会った。チェンバレンは至極友好的で、ヘルツェルはシナイ入植(エルア



ジョセフ・チェンバレン

リシュ計画)の可能性を打診した。チェンバレンは、「結構と思うが、あの地域は外務省の管轄であるから、ランズダウン外相に会え、カイロ駐在のクロマー高等弁務官に対する根回しも必要」と言った。チェンバレンの紹介で会った外相は丁寧に対応し、協力を惜しまぬとしながらも、エジプト政府とクロマーが最終的な決定権を持っていると答えた。

その後ヘルツェルは、イギリス側と調整の上専門家5名編成の調査団をカイロに送った。エジプト政府からはトーマス・H・S・ハンフリーズ兵要地誌局長が加わり、現地調査が実施された。そして、水さえあれば入植可能という調査結果が出た。

しかし、十分な水はナイル川にしかない。スエズ運河を経てエルアリシュまで導水するには莫大な金がかかる。エジプト政府は1903年5月17日付でナイル川の水は使えないと回答し、英外務省も同年7月16日付でエルアリシュ計画は実行不能と正式に回答した。

ヘルツェルは、この回答を得た後サンクトペテルブルクに向かったのであるが、ロシア滞在中、グリーンベルグから手紙をもらった。中には英政府アフリカ保護領担当のサー・クレメンツ・ヒル局長のグリーンベルグ宛書簡の写しが同封されていた。



アブダル・ハミッド2世

当の Sultan、アブダル・ハミッド2世に対する要請も成果はなかった。ヘルツェルは1896年に謁見を申し入れたが、それが許されたのは、実に5年後の1901年5月17日であった。ユダヤ人の土地所有と3か月以上の滞在を禁止するという話が伝わっており、ヘルツェルは焦慮感をつららせていた。ヘルツェルは、ユダヤ人の自由な入植と土地購入を認める公けの政治宣言が欲しかった。会見でヘルツェルは、150万英ポンドの借款提供を申し出ている。調達できる確信はなかったが、Sultanの台所が火の車であることを知り、交換条件として提示したのである。ヘルツェルは、その後